友人一家の死

松崎天民

青空文庫

○

K君――。

物価暴騰の声に、脅やかされているばかりが能ではない。時には遊びの気分に浸って、現実の生活苦を忘れようではないか。――僕達はこうした主旨から、大正八年七月川開きの夜を、向島の百花園で、怪談会に興じた。

泉鏡花氏、喜多村緑郎氏の他、発起人として尽力したのは、平山蘆江氏や三宅孤軒氏などであった。七夕祭の夜、喜多の家の茶荘に招かれた時、平山君や僕から言い出した催しとて、趣向の事や人の寄りなどに就いては、人知れず苦労していた。しかし世間には、同趣味の人達が多いと見えて、三十人か五十人、多くて七十人位であろうとの予想は外れて、当夜になると百五十人からの参集者があった。

従って、シンミリと寂しかるべき怪談会は、意外にも賑かな陽気な集会となって、芸妓達の白い顔や、芸人達や料理屋の主人と云ったような、いなせな連中が気勢を添えてくれた。

「こんなに集っては、仕様がありませんね。会費をウンと高くして、十円位にすれば宜かった……」

「え、五円と云うところでしたね。しかし数に於ては成功なんです。怪談祭の気味にはなったが、まず結構としておく事ですね」

僕達はこんな事を云って、ボツボツ来始めた人達を案内しているところへ、自動車で駈け付けたのは、泉鏡花、喜多村緑郎、久保田万太郎などの諸氏であった。続いて錦城斎典山の顔が見えたり、伊井蓉峰、福島清、花柳章太郎などの姿が、幹事室の前に現れたりした。

川村菊江、桜井八重子など、女優の顔も見えたようであった。赤坂、新橋、柳橋、浅草の芸妓達も、四五人ずつ連れ立って出席した。

K君――僕はこの時、久し振りに、泉鏡花氏と逢って、怪談以上の或る悲しい事実を聴いた。

僕は今それを、君に宛て書き送ろうと思う。

○

鏡花氏と僕とが、初対面したのは、「風流線」を藤沢、喜多村が本郷座に上演した時か、それとも芝の紅葉館で、第何回目かの紅葉祭を催した時か。今たしかには覚えていないが、兎に角、途中で逢っても、「今日は」「や何処へ」と云う位の知合にはなっていた。

その鏡花氏に逢って、僕が先ず聞いたのは、今井君夫妻の忘れ形見の身の上なのであった。

「去年でしたか、上京してお宅に居ると云う端書をくれた限りで、無沙汰しているのですが、今は何うしていますでしょう。一度お宅へ伺って、今井の娘にも逢おう逢おうと思っていながら、つい御無沙汰していましたが……」

「おう、その今井の娘に就いては、実に気の毒な話があるのですよ。私の宅へ来てから……」

と、鏡花氏と僕が話かけているところへ、いろんな人が挨拶に来たので、僕は心にかかりながら、喜多村氏と他の話をしたり、来会者へ挨拶したりして、忙しい一時間を過ごした――。

K君――この今井と云うのは、僕と同じ作州落合の生れで、幼年の頃から竹馬の友であると共に、また村役場へ雇われて、共に筆生を勤めた苦労の友達であった。東京へ来てからは、性来の吏才が役に立て、大蔵省の判任官を奉じ、長い間煙草専売局に勤めていた。妻と男の子一人、女の子三人の六人暮しで、住宅は麹町下六番町十番地の長屋建であった。その筋向うの二階家が、恰も鏡花氏の住宅なので、今井夫妻は深くも交際しなかったが、幼い娘の子達は、色白の可愛い盛りを、子の無い鏡花氏夫妻に愛しがられて、殆ど毎日のやうに出入していた。

当代有数の知名な小説家と、名も無い専売局の一属吏と、二人は交るべく余りに世界が隔り過ぎていたが、その隔りの垣根を越して、鏡花氏夫妻の愛に甘えていたのは、下の女の子二人であった。今年十三と七つのS子とM子は、鏡花夫人を第二の母のように懐しんで、その慈愛に弄ばれていた。殊に幼いM子は、色白の美しい上に、明敏な質であったので、生れ落てから直ぐ鏡花夫人の愛の掌に抱れて、三つとなり五つとなった。

そうして過ぎ行く月日の間に、M子の母は午後になると倦怠と発熱を覚え、夜は冷たい寝汗に苦しむような病人となった。

悲劇はこれから醸されたのである。

○

何も彼も話さねば判らぬが、僕が今の妻と知合になって、正式に結婚を申込んだ時、仲に立て世話してくれたのは、この今井であった。大正四年五月上旬から下旬までかかって、愈々型ばかりの結婚式を挙げた時、席に列してくれたのは、この今井君と角田浩々歌客の二人だけであった。細君は余程悪くなって、声も嗄れていたし、咳も出るし、午後の熱にも苦んでいる様子に見えた。

「細君が病中のところを、種々御尽力になった。僕の方はこれで片が附いたが、細君の病気は何うだね。僕は不遠慮に云うが、肺に異状があるのではないか、ね」

「いや、高田耕安氏にも診て貰ったし、他の医師にも診て貰ったが、肋膜の方は悪いけれど、肺には異状が無いのだそうな」

「それなら宜いけれど、一度、友人の武田君か金田君かに見て貰っては何うだね」

「武田にも診て貰ったが、肺ではないらしい」

僕達はこんな会話をして、別れた限りであった。その年の夏には、細君の病状が俄に進んだので、今井は一家を挙げて伊豆の伊東に転地し、秋風が吹く頃まで、そこで暮していた。長い間の事ではあるし、役所の方は休んでいたし、随分金にも困った様子であったが、当時の僕は浪人していたので、今井のために何の助けにもなる事が出来なかった。僕はそれを想う毎に、友情を表明し得なかった腑甲斐なさを、口惜しく思い、残念に思い、不本意に思って、浅からぬ罪を荷っている様な心持がして堪らなかった。

「一度、見舞に行くべきであったに、相済まぬ事をした。今井君も定めて、薄情な奴だと思っているに違いない……」

僕等夫妻は、何時もこんな話をしては、今井一家の多幸を、心の中で祈っていた。

そこへ久し振りに、今井から端書が来て、僕は初めて細君の死去を知った。「伊東で火葬にして、遺骨は故郷へ持て帰って埋葬する」

との知らせもあった。「妻の骨を持て帰省した。昨日教会で葬儀を営んだ」と云う端書も来た。

腸チブスで妻を失い、悲しい経験を辿っている僕は、その通知を得て、名状し難い気持がした。

「今井も遂に、僕の仲間になった……」

その頃の僕は、恥しい話であるが、五円の香典を送るのも、不如意勝であった。

「東京へ帰ったら、一度訪ねて行こう」

そう思っている間に、今井は再び上京して、玉川電車沿線の三軒家に借家して、相変らず専売局に勤めていた。大正五年となり、六年となったが、僕は旧友を訪ねて、昔話をするような気持になれず、今井には依然として、無沙汰勝の月日を送っていた。

○

K君——誰が何と云っても、世に怖るべきは結核性の病気である。僕の結婚当時から、腹が痛むと云って食べ物に注意していた今井は、何時の間にか腸結核に罹って、不治の病床に呻吟していた。しかもそれを僕が初めて知ったのは、今朝死亡したと云う日の正午頃であった。

僕は愕然として、泣くに泣かれぬような心持がした。自分が長い間無沙汰していた事などは忘れて、病気している事位は、予じめ知らせてくれても宜さ相なものにと、驚きもし悲しみもした。——結婚の世話になって以来、碌にしみじみ話をする機会も無い間に、今井は杳然として死だ。——こう思うと、僕はこの胸を絞め付けられるような心地がして、出そうになった涙も、容易には流れて出なかった。

三軒家の宅へ行って、友人三五人と共に、納棺の手伝いをした時、僕は初めて落涙した。今井が病気で死んだ事に対しては、寸毫の責任も無いけれど、彼が在世中に、親友の一人として、僕は何程の力を致したであろう。細君の病中や死去に際しても、今井の病中に対しても、僕は慰めの言葉すら、怠っていたではないか。凡そ今井の友人として、僕ほど不信な、僕ほど非人情な、僕ほどのほうずな男は、何処にあろうとも思われない。死だ後の今となっては、この苦しみも、悲しみも、思い遣りも、何の力ない空な事になってしまうではないか。

十八になる長男は、蒼白い顔をして、如何にも父か母かの病菌を受けているような様子に見えた。

「君まで病人になっては不可いぞ。心を丈夫にもって、早く健康になって働くのだ、ね……」

僕はこう云っている間に、我ながら涙ぐましい心持になった。十五歳の秋、母を失った当時の僕を想い起して、悲しい気持がした。妻の無い母の家で、病み疲れていた今井の心持を想った時、僕はハラハラと落涙した。頼りと思う病床の父に侍して、不如意勝な幾月日を送って来た子供達の心持を想像した時、僕は両手で顔を掩うて泣いた。

「何と云う不幸な一家であろう」

雨の翌日、子供達と共に、今井の死骸を火葬場に送って、永久の別れを告げた。僕の竹馬の友で、親友で、妻の媒介人で、何かにつけて兄侍していた今井は、こうしてただ一片の骨と化ってしまった

……。

K君――しかし悲劇は、以上で終ったのではない。この手紙を、今暫く書き続ける事を、恕してくれるなら、君は人生の生々しい哀話に、必らずや心を動かされずにはいられないと思う。

○

今井君の骨を抱いて、その忘れ形見達と共に、僕が美作山中の故郷へ帰ったのは、桜花に早い大正六年四月上旬の事であった。

母の死や父の死で、病気が重くなっていた長男のTは、「死ぬるのなら故郷で死にたい」と云って、僕達の一行よりも先に、東京を立って帰省した。僕と三人の娘達は、岡山駅で友人の石田に迎えられ、それから更に中国鉄道に乗換えて、福渡駅まで急いだ。

福渡からは旭川の流れに沿って、山の麓路を七里余、人力車に曳かれて進んだ。大正二年の夏、十五年振りで帰郷してから、足掛け五年の月日は過ぎていたが、故国の春の風物は、僕のために懐しい旧山河であった。村の入口では、多数の旧知己に迎えられて、僕達は故郷の人々の中に包まれた。

翌日は教会堂で、今井の葬儀が営まれた。薬屋の司会で、小学校長の説教、理髪床の主人の聖書朗読に次いで、祈祷もあったし、感話もあった。石田は泣いて故人との友情を語り、僕もまた東京から従いて来た仔細を言葉少く述べた。――東京で淋しく死だ今井も、故郷の人達の友情に依って、こんなに手厚く葬られる。自分も最後の呼吸を引取る時には、故郷の人々の腕に縋りたい――。僕はこんな事を述べて、涙ぐましい心持になった。

桜堂の山の半腹にある墓場には、細君の墓標が淋しく立っていた。今井君の墓穴はその墓標の隣に、小さく掘り下げてあった。讃美歌を歌い、祈祷をささげた後、白木の骨箱を埋めて、土塊を投げ込んだ時、コロコロと侘しい音がした。その音は、今井と僕との永久の別れを告げる悲しい響きであった。年上の娘は、顔を両手で隠して慟哭した。人々は愁然として、墓場の黄昏を背後にしながら、桜堂の山を下った――。

父の骨よりも早く東京を立った長男のTは、その夜、病み疲れた身体を、母の実家に横えることが出来た。「これでもう大丈夫、病気も楽になったような心持がします」と云って、十九になるTは、心から嬉し気に微笑んだ。「今井の死」は、これで漸く片付いたが、次には長男のTが……僕は何となくそう思って、暗い気持がした。不幸にして両親を亡くしたけれど、四人の子供達には幸福あれと祈って、僕はその夜を、川添の家で寝た。

東京から故郷の山中まで、僕の心にコビリ付いていた「今井の死」から、一刻も早く完全に脱れたい……。僕はそう思って、四五人の旧友達と共に、鰆のおつくりを肴に、村の酒を飲だりした。

滞郷僅に二日の後、東京へ帰って見たら、桜花は今を盛に咲き匂うていた。

○

K君――今井の長男Tが、故郷で血を吐いて死だのは、それから二ケ月ほど後の事であった。恐しい結核菌は、今井夫妻の生命を奪ったのみでなく、その長男の望み多い半生をも、無残に亡ぼしてし

まったのである。

平尾不孤、畠山古瓶、山下雨花、加藤唖蟬、田中稲月、玉井一二郎、国木田独歩、永井定太郎、山田桂華、桃中軒雲右衛門、渡辺亮輔など、多くの知人や友人を、結核菌のために失っている僕も、今井一家に巣うた毒菌の根強い恐しさには、今更のように戦慄した。

嘉悦孝子さんの女子商業学校を卒業した姉娘だけは、小柄ではあるが壮健なように見えたが、下のS子とM子とは、何となく弱々しく見えていた。現にM子は国へ帰る時、頸部に湿布をしていたし、S子は頬を紅潮して、気のせいか熱もあるように見えていた。

「姉と妹二人きりになったのです。故郷の人達の同情に依って、何とか生活して行く道はあるでしょうが、身体だけは何うか大切にして下さい。この上、あなたかお妹さんでも病気になると、それこそ取返しが付きませんからね……」

僕はこんな手紙を姉娘に送って、気勢を添えもし慰めもした。しかし東京の女学校を卒業した気丈な娘と、郷人の気心とが、果して巧く合致するか何うか。故郷の落合町よりも、未だ三四里山奥の遠縁の者と、話が持上っていた縁談は、その後、何うなったであろう。姉娘は東京へ出て、一人で働いて暮したいような希望があるらしかったが、その後、何うした事であろう。僕は気にかかりながらも、その日その日の生計に追われて、久しい間、故郷とは消息を絶っていた。

そこへ姉娘から突然「数日前上京いたしました、何のお変りも御座いませんか、一度お尋ねせねば済まないのですが……」という端書が来たのは、今年の春浅い頃であった。端書の表面には「趨町下六番町泉様方にて」とあって、何うして上京したのか、妹二人は何うしたのか、これから何うする積か、そんな事は何も書いてなかった。

「おい、今井の姉娘が上京したそうだよ。鏡花さんの宅からとしてあるが、彼の娘もいろいろと苦労をしているのだ、ね」

「そうですか、一度訪ねてあげては何う。構わないから宅へ来れば宜いのに、ね」

僕達はこんな会話をしたが、それから今日まで、娘も訪ねて来なかったし、僕も気にはかかりながら、その日の仕事や忙しさに紛れて、鏡花氏の宅を訪ねようとはしなかった——。

それが偶然にも、怪談の会の一夜、向島の喜多の家茶荘で、鏡花氏と僕とは、久し振りに逢ったのであった。僕が何よりも先ず泉氏に向って「今井の娘」の事を尋ねた心持も、実にこうした過去の事実や関係があるからであった。

○

K君——怪談会は夜中の十二時頃から、茶荘の二階で賑かに開かれた。喜多村君の開会の挨拶に次で、典山の小夜衣草紙や、福島清君、伊勢虎君、伊藤晴雨君、鹿塩秋菊君など、数々の怪談が、次から次へと人々を喜ばせた。

鏡花氏は熱い磐若湯を飲んで、少し昂奮しておられたが、矢張り熱心な怪談の聴者の一人であった。新俳優の某が、物凄い色懺悔をして、一座が少し緊張した時、僕は鏡花氏の傍へ寄って、低い声で言葉をかけた。

「……でその今井の娘ですが、その後何うしましたでしょう」

「いや、何うも気の毒なこってしてね、SとMと二人の妹を連れて上京したんですが、Sの方は左右の肺とも、空洞になっていたそうで、コロリと死でしまいましたよ……」

「えっ、あの縮れッ毛の可愛い女の子が……」

「そうです。妹のM子は、四月に私の宅から、番町学校へ上げましたが、この子がまた悪くてね、四五日経つとS子の後を追って亡くなったんです」

「ま、何と云う事なんでしょう。私は端書を貰ったきりで、訪ねても来ませんし、訪ねても行きませんでしたが、そうですか、とうとう結核菌のために、一家全滅してしまったのですね……」

「姉娘が一人だけ、漸く生き残っているのです。妹二人の小さい骨箱を抱いて、愁然として国へ帰りましたよ。妹二人に先立れるために、わざわざ作州の山中から出て来はしなかったと云ってね、可愛相に、怜悧な姉娘も取乱して泣いていましたっけ……」

K君――泣くに泣かれぬ話とは、こうした事を云うのではあるまいか。怪談会を背景として、泉鏡花氏の口から、こうした新事実を聴いた僕は、余りに身近な、余りに生々しい現実の哀話に、何とも形容し難い重々しい心持に落ちた。――

入代り立代り、いろんな人が、いろんな怪談を聴かしてくれたけれど、僕にとっては、これ以上の怪談、これ以上の物凄い話、これ以上の悲しい、痛ましい、哀れな話はなかった。すべての者、皆逝く――残れる者も亦逝く――。これが人生であろうけれど、それにしても、今井一家のみを虐げるというのは、何という陰惨な事実であろう……。

この八月十四五日頃には、故郷から石田が上京すると云って来た。僕は石田に逢った上で、更に「今井一家の死滅」に就き、その後の詳しい径路を尽そうと思っている。

K君――今はただ以上の事実を、君に宛て報告するに止めておこう。

（松崎天民『四十男の悩み』一九二八［昭和三］年、有宏社、所収）

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　鏡花百物語集」ちくま文庫、筑摩書房
　　2009（平成21）年7月10日第1刷発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2018年4月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

友人一家の死

松崎天民

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/